

芭蕉「升買ふて」の一幅に触れて

小瀬 渺 美

最近、岐阜市内高橋氏宅で、軸装にされた芭蕉の句を拝見する機会を得た。

句は

升買ふ亭分別かは類月見可那 はせ越

である。

この句は『校本芭蕉全集』発句篇の元禄七年の部に

十三日は住よしの市に詣で、

升かふて分別替る月見哉 芭蕉

の形で収められているもので、芭蕉年譜（『校本芭蕉全集 第九巻』元禄七年九月十三日の条に

住吉神社に詣で、宝の市を見物する。この日も病気不快のため、

畦止亭十三夜月見の句会に出座する予定を取りやめる。

とあることと併せ考えると、芭蕉の住吉神社参詣は元禄七年九月十三日のことである。

このことは、元禄七年十一月晦日付の「芭蕉翁追善之日記」（支考）にも、同じ九月十三日の条にみえる、

十三日

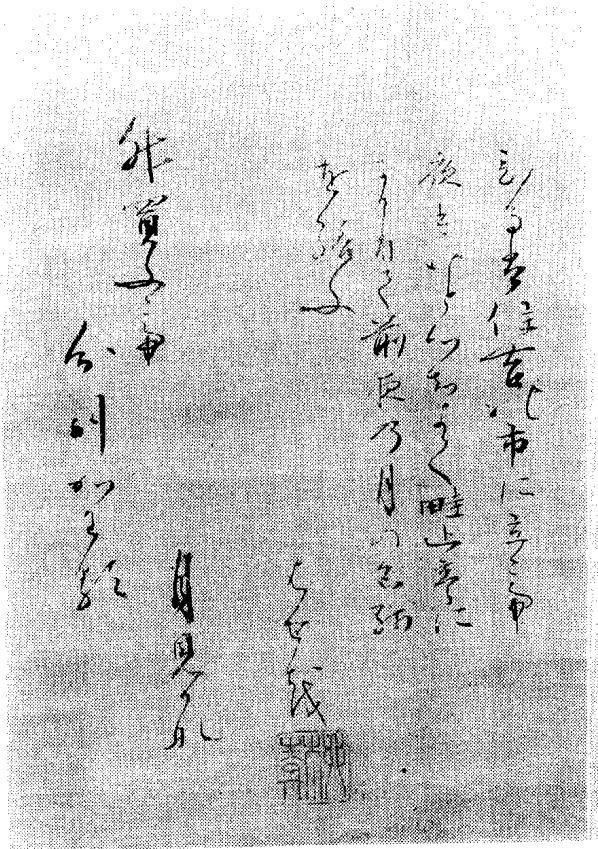
住吉の市とは名のみ聞て、宗因の「さらばさらば」となぐられし跡のなつかしくて詣けるに、其日は雨もそぼ降て吟行静かならず、殊になやみ申されしが「けふもわづらはし」とてかいくれ帰りける也。

（『校本芭蕉全集』所収）

や、あるいは同じ支考の「笈日記」に記している

今宵は十三夜の月をかけてすみよしの市に詣けるに昼のほどより
雨ふりて吟行しつかならず、殊に暮くは悪寒になやみ申されし
かその日もわつらはしとてかいくれ帰りける也 次の夜はいと心
地よしとて畦止亭に行て前夜の月の名残をつくなふ住吉の市に立
てといへる前書ありて

升買て分別かはる月見かな 翁



などによって、この句の成った経緯のあらましを知ることができる。

「住よしの市」は、旧暦九月十三日、住吉大社で行われる五穀豊
穰・商売繁栄を祈願する祭礼である。住吉大社は現在の大阪市住吉
区にあり、祭神は表筒男命・中筒男命・底筒男命に神功皇后である。
招福除災・延命長寿・商売繁栄の神として、江戸期には西国の大名
も参勤交代の途次に参詣したという神社で、「延喜式」にも見られ
る創建の古い、由緒のある社である。

黄金の枀に新米を盛り、神に供えると共に、境内では枀を売った
ことから「枀の市」「宝の市」などと称されている。

「華実年浪草」(鹿文 天明三年刊)にも、

住吉社地に市媛神社あり。津守遠祖祖田搓宿禰夫婦を祭るとなり。
これ市を守る神なり。をもとの社といふ。諸国市の始まりといへ
り。升を売り買ふゆゑに、升の市ともいふ。また、銀を入るる器
を取鉢といひ、升と同じく売買す。

と住吉の市の由来を記している。

「笈日記」に見られるこの句の前書に出てくる畦止は大坂の人で、
姓を長谷川と称したが、その詳伝は未詳である。元禄八年ごろ歿し
ているようである。

芭蕉は、九月十四日、九月二十八日の二度この畦止亭を訪れている。

十三日には、「其日は雨もそぼ降て吟行静かならず」「けふもわづらはし」というわけで、畦止亭での十三夜の月見に赴くことを見合せ、翌十四日に前夜の月見に代わって七吟歌仙を巻いたわけである。連衆は、芭蕉・畦止・惟然（素牛）・酒堂・支考・之道・清流の七名であるが、その冒頭部分を示す。

住吉の市に立てそのもどり長谷川

畦止亭におのく月を見侍るに

升買て分別かはる月見かな	芭蕉
秋のあらしに魚荷つれだつ	畦止
家のある野は茹あとに花咲て	惟然
いつもの癖にこのむ中腹	酒堂
頃日となりて土用をくらしかね	支考
榎の枝をおろし過たり	之道
溝川につけをく筈を引てみる	清流

〔住吉物語〕

が、その一巡である。なおここに登場する清流は稲津氏。堺に住み、

紀国屋文左衛門の手代を勤めたのち、剃髪した祇空の前号である。享保十八年七十一歳で歿している。

九月二十八日も畦止亭を訪れているが、これは夜になってからのことで、芭蕉の

月澄むや狐こはがる児の供

を初めとして、畦止・酒堂・支考・惟然・泥足・之道らと句座をもっているが、日時や芭蕉の句からみて、掲出の「升買ふて」の句とはかわりがないと思われる。

この句の初出は、元禄七年九月二十五日付の正秀宛芭蕉書簡とみられる。

この芭蕉書簡はかなり長文であるが、その末尾の、句を記している部分を挙げると

○菊に来て奈良と難波ハ

霜月夜

又酒堂が予の枕

もとにていひきを

かきしを

床に来て軒に入るや

きりくす

十三日ハ住よしの

市に詣て、

升かふて分別替る

月見哉

壺合斗(マ)一ツ買申候間

かく申し候 少、取込候間

早筆御免

芭蕉

九月廿五日

とある、「住吉物語」(竹堂清流編)は元禄八年刊と考えられるので、「升買ふて」の初出はこの正秀宛書簡とみて良いであろう。

以上のことから言えることは次のようなことである。

まず、芭蕉が住吉神社に詣でた日時についてである。升の市が旧暦九月十三日に行われる行事であること、正秀宛芭蕉書簡の句の前書に、「十三日ハ住吉の市に詣て、」とあることなどから、住吉参詣は九月十三日の出来ごとである。

この日芭蕉は枅を求めている。正秀宛書簡から、それは「壺合斗」であった。

次にこの句が作られたのは、住吉の市に赴いた十三日か、句座が

もたれた翌十四日ということになるう。

さて、拝見した芭蕉の句文は、

ひる盤住吉能市に立亭

夜盤いと心知よく畦止亭に

ま可利て前夜の月の名残

を繕ふ

はせ越

升買ふ亭 月見可那

分別か王類

というものである。

「ひる」「夜」が、共に九月十三日のことで「住吉の市に立てそのもどり」に畦止亭に招かれたのか、あるいは「ひる」は十三日、夜は、「前夜の月の名残」りん楽しんだのかは、この前書だけでは問題が残るところであるが、「いと心知よく畦止亭にま可利て前夜の月の名残を繕」ったのが十四日のことであるとすれば、この「ひる」は十三日のことではなければならぬまい。

句意は「笈日記」(支考 元禄八年)に述べるところと併せ考え

ると、

前夜は後の名月の前、九月十三日。格別の情を催すはずの夜である。ところが宝の市で群衆の中にまじって一合枡を買ってみた、すると、急に心まで世俗的・常識的になってしまって、風雅・風流の心も褪せ、物の判断もかわり、句会に出ようと考えていた分別も失い、句会に出る意欲もなくなってしまった。

と興じてみせた句である。

実は当日（十三日）は、「昼のほどより雨ふりて吟行しつかならず」（『笈日記』）、九月十日夕刻から始まった悪寒・発熱・頭痛に悩まされていたという体調不良に加えて、この日「暮々は悪寒になや」まされたため、句会に出られなくなったのを、この日のにぎやかな祭の雰囲気と壺合枡を買ったことによって「分別かはる」とユーモラスな表現をとったものと考えられる。

「ひる盤住吉能市に立亭」と「夜盤いと心知よく畦止亭にま可利て」とは同日の出来ごとのように見える気配も感じられるが、その後の「前夜の月の名残を繕ふ」からすれば、「ひる」は十三日の住吉参詣を指し、「夜」は畦止亭に「心知よく」訪れることの出来た十四日とみて不都合はないであろう。

こうした状況から、この句の作られたのは、芭蕉が住吉の市を訪れた後、「分別」がかわって畦止亭に立ち寄ることなく宿舎に帰っ

た十三日、または、実際に畦止亭に赴いて句座に連った十四日のいづれかということになるであろう。「前夜の月の名残を繕ふ」からすれば、十四日作とみる方が隠当であろう。

またこの一幅が認められたのは、句の作られたとみられる九月十四日を上限とし、病いが篤くなって、久太郎町御堂ノ前花屋仁右衛門貸座敷に病床を移される十月五日ごろまでを下限と考えて良いのではないかと思われる。

いずれにしても、死の一月以内ということになり、芭蕉最晩年の消息を伝えるものとして興味が持たれるところである。

管見では、紙面全体の文字の配置には落ち着きがあり、文字の筆づかいには遅滞逡巡もみられず、筆の運びには生気があって不自然さは感じられない。

真贋の断定は芭蕉の筆蹟研究の専門家にゆだねたいが、伝承の経路が大阪から岐阜に移されたものであり、計量器関係の旧蔵者から現所蔵者に伝えられたものであることなどを含めて、説得力のある一幅である。